は、「馬」にも比すべき強大な支配者の力、その象徴である。街道の端に上下座して、武家の行列を見送る農民の姿は、まさに「雀の子」にも比すべく、哀れにも小さいのである。「花見んと致せバ下に〳〵哉」（八番日記）、「何者の花見や脇よれ〳〵と」（同）、「づぶ濡の大名を見る巨燵哉」（同）などと、併せて解釈すべきものである。

狂言言葉によったのであろう「そこのけ〳〵」を使って、また、子供の「馬ごっこ」のかけ声らしく見せかけて、一茶は現実を告発しているのである。

柏原帰住後の一茶は、都会の享楽的な生活をほとんど句にしていない。彼が深く心を寄せたのは、庶民の哀歓か時代の底辺にうごめくようにして生きる弱者の生きざまや、その心情についてであった。その一方には、「馬迄もはたご泊や春の雨」「雀の子そこのけ〳〵御馬が通る」に見られるような、体制や社会に対する批判の姿勢があったのである。だからこそ、傍観者の域を超えて、告発者・批判者たるをえたのである。

はつ瓜を引とらまいて寝た子哉[2]　（文政2）

この句、『おらが春』には、中七を「引とらまへて」の形で収めてある。「はつ瓜」は、その年はじめて収穫した「マクワウリ」、和種のメロンと言ってもよかろう。古くから、「瓜」をおいしいものとして尊んだことは、『万葉』の憶良の歌を引きあいにするまでもなかろう。「あと何日」と言い聞かされていた子供が、「それ、はつ瓜だ」と、泥のついたままの瓜を手渡された。この子は、しばらくそれをだきかかえ、ほほずりをして家中をはしやぎまわっていたが、いつしかそれをかかえたまま眠り込んでしまった。泥のついたままの瓜を、その小さな胸にしっかりとだきかかえているさまは、「引とらまいて」によって、あますところなく表現されている。

この句は、従来、その野性味ばかりが強調されてきたが、一茶がそこに「美しいもの」として見たのは、人間本来のあるべき姿だったのではなかろうか。

人は生まれながらにして、「仏性」を得ているとくり返して述べる一茶は、その本態をはつ瓜を引とらまいて寝た子の表情に見出して、ほっとしているのである。一茶における時代や社会に対する批判、それはこうした彼の人間観の上に立ったものであることも、同時に確認しておかねばならない。そう解釈するにあたって、「はつ瓜を引とらまいて寝た子」、それが、どこのだれであったかの詮索も無用となろう。

注

（1）同氏『小林一茶』（昭46、桜楓社）79P。

（2）ここでは一例をあげるにとどめておく。「餅花の木陰にてうちあはゝ哉」（七番日記、文化10）、「蚤の迹かぞへながらに添乳哉」（七番日記、文化15）、「蓬莱になんむ〳〵という子哉」（おらが春）、「其迹は子どもの声や思やらひ」（八番日記、文政2）など例句はいくらでもある。

『寛政三年紀行』の旅、蕨の駅で、一茶は次のような体験をした。

戸田の渡りを越へて、わらび駅に入れば、薄々と日ハ暮ぬ。大名のとまりとて、おごそかに幕打廻し、あらたに砂蒔ちらし、門〳〵ハ従者の名札を張りて、右に左に棒をつきて、非情の輩をいましむると見えたり。孤身斗藪の旅人、やどりかさぬハことわりなれど、大道をさへ追払ふ。よし草に伏、木を宿とせんハ初よりの思立なれば、おどろくべきにあらじと、痩たる跟を引て、次の里へと志す。しかるに、闇雨しきりに落て、横風裾をたゝき、殆すゝミわづらふ。うしろより「舎りかさん。」とよばハる声、神の引合わせかとうれしく、莚一ッをあが仏とたのミて、一夜を明す（四月一〇日）。

蕨は中仙道の宿駅（現埼玉県内）であるが、ちょうどさる大名の宿泊に出会って、宿をとることができなかった。そればかりか、天下の「大道をさへ追払」われてしまった。覚悟はあったものの、「闇雨しきりに落て、横風裾をたゝき、殆すゝミわづらふ」中に、「舎りかさん」と声をかけてくれる者があって、その家で一夜を明かした。しかるに、支配者の階級に属しているというだけで、「馬迄もはたご泊せ」がかなうというのである。

『八番日記』文政二年二月の部には、

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る

がある。この句、人口に膾炙され、雀の子と遊ぶ一茶というイメージが広がっている。

一茶には「けむからんそこのけ〳〵きり〴〵す」（七番日記）、「やよ蝶そこのけ〳〵湯がはねる」（同）などがあり、「そこの〳〵けは、常套語の一つであった。それは、すでに指摘されているように、狂言『対馬祭』「文句の馬場退け〳〵、お馬が参る〳〵」、黄表紙『稚衆忠臣蔵』の「山のぬしはおれひとり、おんまが通る、さきのけっ、さきのけっ」によるものだった。また、子供の遊戯としての「馬ごっこ」が各地にあったことも事実である。だが、「馬ごっこ」にたわむれる童児の姿から、路上の雀の子に呼びかけたという解釈を私は採らない。

『寛政三年紀行』は蕨の駅における一件、これを背景にして、この句は解釈されなければならない。そう解することによって、この句が泰平の御代をうたったものではなく、現実的事実の告発、ないしは時代や社会、特に体制に対する激しい批判と見ることができるのである。

蕨の駅における屈辱的体験を経て、「馬迄もはたご泊や」「馬迄も朋黄の蚊帳に」と、その事実に対する批判が噴出したように、「雀の子」の句もまた、現実の告発、時代や社会に対する批判と解さねばならない。

「雀の子」と「御馬」は、力という観点をもっての対比である。その力とは、いうまでもなく権力である。すなわち、「雀の子」は、「雀の子」にも比すべき弱者・被支配者の力、その象徴である。「御馬」

できない。通常、その距離は一〇キロにも及ぶのだった。麦秋、高温にして多湿の気候である。その中を、乳飲み子を負い、荷をかついで売り歩く。まさに生きるためにである。

「から呼されし按摩坊」の句、「按摩坊」は、今の指圧・マッサージ師であり、目の不自由な人の仕事であった。勘杖をつき、竹の笛を吹いて、夜の市街を流し歩いたのである。木枯しの吹きすさぶ中、「ピイッ、ピイッ」と笛を吹いてまっ暗な街を行く。どこかで、「按摩さあん」と声がかかった。そう感じて耳を澄ましてみると、それは木枯しのいたずらだった。按摩坊は、また吹きすさぶ木枯し中を「ピイッ、ピイッ」と笛を吹きながら流して行く。これも「身一つすぐすとて」のことである。冷たく身を突きさすような木枯し、それはそのまま按摩坊の境涯・心境をあらわしている。吹きすさぶ木枯しの中に、「ピイッ、ピイッ」という笛の音を聞きわける一茶の耳を見のがしてはなるまい。

「重箱の」の句、『おらが春』では、前書を「善光寺門前ノ隣ニ乞食ヲ」としている。「重箱」は、重箱のような箱。それ以上の詮索は無用であろう。薄暗い空から降りかかる北国の時雨はことさらに冷たい。うすよごれた箱の中に、四、五文の銭が投げ込まれてあり、それを前に乞食はうずくまるように座して動かない。四、五文の銭、それは、この乞食の一日の稼ぎである。季語の「夕時雨」という言葉の持つ趣味が一句をみごとに統一し、また乞食の境涯や心情を象徴的にあらわしている。

「女やもめ」「鰯売りの女」「按摩坊」、そして善光寺門前の「乞食」、それぞれの境涯は、決して彼らが進んで求めたものではない。そして、一方には、「月の花のと」浮世を謳歌する人々もある。その双方の世界を踏み越えた一茶は、浮世の底にうごめくように生きていかなければならない人間の、その真実を詠もうとしたのだった。真実を的確に詠むことは、そのままその悲痛な現実を告発することでもある。

三

悲痛な現実を直視し、それを真っ向から詠む一茶の眼には当然のごとく、時代の支配者たる武家の横暴もうつった。

鰯めせ〳〵とや泣子負（おび）ながら　（文政2）
馬迄（まで）もはたご泊（どまり）や春の雨　（同）

三絃で親やしなふや花の陰　（文政4）
何者の花見や脇よれ〳〵と　（〃）

「馬迄も」の句は、『八番日記』の文政二年二月と三月の部に重出。同年閏四月の部には、「馬迄も朋黄の蚊屋（帳）に寝たりけり」と推敲してある。この句における「馬」は、武家の、しかも地位のある者の馬である。

「月花や四十九年のむだ歩き」「花の月のとちんぷんかんのうき世哉」（文化8）と、それまでの俳諧師としての生の軌跡をかえりみることが可能となったのだ。『我春集』の序で言う生活実感を重んじた新しい俳諧の主張もまた、そこから発したものだった。

『八番日記』の時代に入って、

（三月）七雨

妙(明)専寺内タカ丸荒井坂ノ川ニ入没。十一才。観了々々ト呼ブト云々。

（閏四月）四雨　晴

鶏母ニ恋慕シテ追ヒ伏ス事甚ク、終ニ女鳥今夜死ス。

（六月二）九晴

下ノ社地ニ越後柏崎ノ老婆没。

（一一月二）四晴

亥刻、おとよ[ト]云女ヲ、市太郎[ト]云男ニ川[ヘ]投込マルル。

（以上、文政二年）

と、その記し方が激減している。そして、「おのが里仕廻てどこへ田うへ笠(ゑ)」「鰯めせ〳〵とや泣子負ながら」「小がらしや廿四文の遊女小家」というような作品が成立するのもこの時期であった。すなわち、現実的事実から一歩しりぞいて、それを諷刺的に詠んでいた一茶が、現実的事実を直視して、その真実を詠もうとするのであった。

「おのが里」の句、前書の「身一つすぐす」は、ただ自分一人が生きていく、の意。「女やもめ」は未亡人。夫に先立たれた下層農民の妻が、ただ自分一人だけの生活のために、休む暇もなく日雇い仕事に出かけて行くのである。「おのが里」、すなわち自分が住んでいる村里、その田植の時期、近隣の農家に雇われて、早乙女仕事に出ていた。水田の田植だから、水の都合でその仕事は二、三日がせいぜい。もちろん自身が耕作する水田はない。「女やもめ」は、これから田植に入る地域にまた雇われて行く。菅笠を頭に、いそいそと「おのが里」を出て行く「女やもめ」の哀れにも悲しい姿に一茶の眼は注がれている。

「鰯めせ」の句、『おらが春』には「越後女、旅かけて商ひする哀さを」と前書して、「麦秋や子を負ひながらいはし(わ)売」の形で収めてある。「越後女」が、妙高高原を越えて信州まで、魚売りに出かけたかどうか、それはわからない。もし、そうだとすれば、それは塩鰯であろう。漁村において、実際に海へ出て漁をするのは男性の仕事である。そして、浜にあがった魚を籠に入れ、天秤棒でかついで売り歩くのは女性の仕事である。麦秋のころ越後の海でとれる鰯は小さく、生で食べたり、塩辛にしたりするのが普通である。雫の垂れる籠を天秤棒でかついで、足早やに売り歩く、そうしなければ鮮度を保つことが

三助が敲く木魚も時雨けり　（同）

堂庭乞食

重箱の銭四五文や夕時雨　（同）

雨の夜やしかも女の寒念仏　（同）

このうち、「木がらしやから呼されし」の句は、『七番日記』文化一三年一〇月の部に、「寒月やむだ呼されし按摩坊」とあるのが初案。「鰯めせ」の句は、『おらが春』に、「麦秋や子を負ひながらいはし売」とあるのが定稿である。

前述のごとく、こういう傾向はすでに『文化句帳』の時代から見え、『七番日記』には、「蚊の中へおつ転しておく子哉」「小盲や身を寒月になして行」「煤はきや火のけも見へぬ見世女郎」「雪ちるや素戻したるアンマ笛」「朝霜やしかも子どものお花売」などと見える。だが、その多くは、対象との間に距離をおいたものだった。それが、『八番日記』の時代に入って、対象の痛みや苦しみをみずからの痛みや苦しみとして積極的に詠むようになる。その証として、「身一つすぐすとて女やもめ[の]哀[さ]は」「越後女の哀さを」（『おらが春』では、「越後女、旅かけて商ひする哀さを」）などの前書をあげることができよう。

『七番日記』には、おびただしい数の三面記事的見聞が挿入されている。文化七年三月の部から二、三の例をあげる。

二晴

夜、浅草御蔵前松平西福寺の西通りなる辻君の閨にて往生とげし男有。山谷辺の者といふ。又常の行倒也とも云。

五晴

此夜、東叡山下広小路にて中間体の者に乞食僧二人、同じ所に殺さるゝ。切人は逃うせぬとぞ。同日昼、白刃を提て「盗人やらじ。」と走る人有。中橋にて虜るといふ。同夜酉刻ごろ、本所緑町一丁目升屋といふ酒店にて、従党して主の首血を出しぬ。又畳へ尿しかけてさわぎぬ。同日寅刻ばかり、緑町一丁目白髪蕎麦の箱かつぎの男、相生町五丁目大瀬屋といふ八百屋の家の上に寝てありけるを人々見咎、夜盗人也とたゝき伏せたるに、男云「ぬす人に非ず。此家の娘に深くちぎりてかくのごとし。」といふ。娘は「さらにしらぬ事。」と云。男いましめの縄にかゝりて獄屋に入り。けふにかぎりてかゝる変事の重りぬるは世にいふ悪日てりたるならん。

十四日　折々雨

昨十四日夜四ッ過、ばんば町最上寺に盗人入けるが、人〳〵打かさなりてくる〳〵まきにして、外へ出して雨に打たせて逃しぬとなん。

一茶をとりまく社会的環境である。社会の底辺にうごめく人間の、生きるための種々相である。その現実を直視することによってこそ、

花の陰此世(この)をさみす人も有(あり)　（同）
今しがた此世に出し蟬の声　（同）
鰒提てむさしの行や赤合羽　（同）

（七番日記）

ドン欲も連てちれ〳〵山桜　（同）
一日や一文凧も江戸の空　（同）
蚊の中へおつ転しておく子哉　（同）
煤はきや火のけも見へ(え)ぬ見世女郎　（同）
世の中は地獄の上の花見哉　（同）
行な螢都は夜もやかましさ(き)　（同）
小猿めがキセル加(咥)へて秋の暮　（同）
天から下りた顔して団[扇]哉　（同）
人間がなくば曲らじ菊の花　（同）
一本の木に鈴なりの小雀哉　（同）

（八番日記）

陽炎の中にうごめく衆生哉　（同）
慾垢のぼんの凹へも桜かな　（同）
来るも〳〵下手鶯ぞおのが垣　（同）
鬼よけの浪人よけのさし柊　（同）
雁どもや御用を笠にきてさわぐ　（同）
虫鳴やわしらも口を持たとて　（同）
花見んと致せば下に〳〵哉　（同）
鬼茨に添ふ(う)て咲けり女郎花　（同）

「世の中は地獄の上の花見哉」「さく花の中にうごめく衆生哉」（以上、文化9）と詠む「地獄の上の花見」「うごめく衆生」を、さらに個別に直視すれば、「地びたに暮るゝ辻諷ひ」「火の気も見へ(え)ぬ見世女郎」の姿や境涯が浮んでくる。現実から一歩しりぞいて、時代や社会、あるいは世の俗や、それに染った人物を批判・嘲笑するという方法は、『八番日記』の時代に入って少しずつ変ってくる。すなわち、「地獄の上の花見」に興ずる人物、俗塵の中に「うごめく衆生」の姿に対象をしぼって、その真実を具体的に描写するという方法がはっきりとあらわれてくるのである。

（文政2）

なぐさみニわらをうつ也夏の月
身一つすぐすとて女やもめ[の]哀[さ]は
おのが里仕廻てどこへ田うへ(ゑ)笠　（同）
七才の順礼ぶしや夕時雨　（同）
越後女の哀さを
鰯めせ〳〵とや泣子負(おひ)ながら　（同）
子を負[て]川越す旅や一しぐれ　（同）
護持院原
木がらしや廿四文の遊女小家　（同）
木がらしやから呼されし按摩坊　（同）

名代にワか水浴る烏かな
山の月花盗人をてらし給ふ
かくれ家や猫ニもすへる二日灸
花の陰あかの他人ハなかりけり
小うるさい花が咲迚寝釈迦かな

というような句と比べてみても、題材とその扱い方、季語とその働かせ方において、また用語において、その近似性を知ることができよう。

通説は、右に掲げたような句風を総括的に一茶調と称し、極端な場合は、それを一茶が開発した俳諧史上の新風のようにも言う。だが、そうした傾向は蕉風以前の俳諧にあり、江戸座や葛飾派にもあったのである。

一茶の俳諧は葛飾派、具体的には素丸や元夢、そしてその周辺の作風に出会って開発された。一茶には蕉風や蕪村調を学んだ時期もあったし、時代の都会的な、軽快な句調に心引かれた時期もあった。だが、一茶自身の詩質に合致するものは、前にあげた『一茶留書』のメモに連なる世界だったのである。

二

「一期の風雅言行ともに洒落にして、焔王も腮をとき、獄卒も臍をかゝゆべし。」（嘉永板『おらが春』逸淵序）、「ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれを尽して、人情・世態・無常・観想残す処なし。」（同、西馬跋）という一茶評は、その後においても中核をなしている。

歴史的に見れば、一茶の作風は、蕉風以降、俳諧史上において見放されていた「焔王も腮をとき、獄卒も臍をかゝ」える「をかしみ」の創造という文学評価の観点をその史上に復活させたということになろう。だが、それは現行俳諧史の上での結果にすぎない。したがって、「をかしみ」の創造、そればかりを強調して、一茶調完成期におけるその独自性の追求がおろそかになってはならないのである。蕉風・中興・天保期に整理される蕉風本流の作家だけでなく、貞門・談林、そして天明前後からの葛飾派や江戸座の作家の作品に比して、一茶独自の、しかも強烈な方法内容を持った作品を提示することによって、一茶調は強調されなければならない。

一茶調の特色の一つに数えられるものに、諷刺的・諷刺的傾向と評されるものがある。この傾向は『文化句帳』の時代からはっきりと見えはじめ、『七番日記』の時代を経て『八番日記』の時代に至って著しくなる。

咲からに風に逢けり花の山　（文化句帳）
奈良漬を丸でかぢりて花の陰　（　同　）
木がらしや地びたに暮るゝ辻諷ひ　（　同　）
行は〳〵江戸見た雁が見た雁が　（　同　）

あは雪やおづ〳〵積る草のうへ
用はみな済んで昼寝のねはん哉
その腹は啼ても減らぬ蛙かな
ありたけをまくつて見せる汐干哉
むづかしき角ふり落せ蝸牛
喰ふて寝て仏もならぬ蓮見哉
斯うむけと筋まで引て真桑かな
寝て見るは勿体なしや稲の花
喰過て声立かねるうづらかな

作者名を一茶と記してもわからない。一茶調の出発点がそこにあるからである。ここにみるような句風は、蕉風以前の、特に談林のそれに近い。一茶自身に、それに近い詩質があり、そういう句風に心を寄せていたことは、『一茶留書』に、貞門や談林の俳書、其角風に談林調を加えたものと評される江戸座関係の俳書からの抜書きの多いことからもわかる。

うつくしい娘の供の反かへり
人になれ〳〵よ所替
治まつた世におしまるゝ力瘤　（島是水点）
生昌が天窓撫る削りかけ

黒主の鼻欠雛は花の陰
今の代の表御門も赤備　（深川鼠肝点）
鶯の身をのび〳〵と母の旅
はい〳〵と木馬牽かせて子の機嫌
美しく出来て泣かせる唖の髪　（深川木髪点）
猫撫て降たのを知る春の宵
盃洗に蟹遊ばせてすゞみ岩　（深川湖十点）
一人づゝ人間に成る煤の風呂　（深川山夕点）
釣鐘の裏を覗て蚊にむせる　（深川永機点）
舟曳の尻からあびるむら時雨　（深川宝井点）
今した椹へひとつ枝雀
三文で有丈愚痴を神の鈴　（東呉点）

江戸座の俳書『俳諧觴』からの抄出である。これらの句を、例えば『おらが春』（第一話）に収めてある、

『七番日記』の後半から、『八番日記』にかけての数年間はいわゆる一茶調の完成期、作風は総じて俚俗的滑稽句とでも称すべきものであった。すなわち、その多くは自身の生活感情を主題とし、そこに用いられた季語は、それを誘発するための材料と言ってもさしつかえない。『我春集』の序で主張した生活実感に基づいた俳諧というのも、多くはそういう傾向の作品であった。

周知のごとく、俳諧師としての一茶は、山口素堂を祖とする葛飾蕉門から出た。一茶が葛飾派の俳士の群に加わったころ、彼らの俳諧はすでに蕉風のそれとは異質なものに変じていた。例えば、葛飾派三世・溝口素丸（渭浜庵）門で、素堂の別号・今日庵を嗣号した森田安袋・後の元夢（一説に、一茶はその門下ともいう）の作風は、

ふつきつて登れば坂に散る桜
六月の花や蚊ひとつ郭公
風呂敷に暑さ背負ふて（う）野中哉
蟬よ〳〵衣忘るな三保の松

（俳諧五十三駅）

同時期の一茶（菊明）の句は、

苔の花小疵（きず）に咲（さく）や石地蔵
白水の流れた跡や小米花
払子（はっす）ほど僧の引行（ひきゆく）根芹哉
出代りや蛙も雁も啼別れ
馬かたの沓かけにくし桃の花

（俳諧五十三駅）

右の例句を収める『俳諧五十三駅』（安袋撰。天明8素丸序）の入集句を見ると、

馬までも七種ふむや日本橋　如件
佐保姫にけふや借着の旅ごろも　竹我
痩馬も重荷休めて川涼（すずみ）　松暁
馬かたの髭まで酔ふて鬼薊　半酔
涼しさや九十五文の大井川　夜笛
此鐘の中から出たる郭公　阿水
蚊ばしらやころり寝て居る夜泣石　中阿

というふうであった。

一茶がその門にあって、執筆をつとめた溝口素丸の作品集『素丸発句集』（寛政8）も見ておく。

大慾は無慾に似たり、至誠は大愚のごとし
嘘つかぬ顔にまで照る初日かな

諷刺から直写へ――一茶調のゆくへ――

黄色瑞華

一

『七番日記』の後半から、『八番日記』にかけて、確かな門派にささえられ、江戸帰りの宗匠として、時勢・時流から解放された一茶は存分な作句活動を展開する。丸山一彦氏の言葉を借りれば、「それは恰も長い間貯わえられた水流が、堰を切って一時に溢れ出たような観がある。古歌をもじり、先人の句の模倣摂取、川柳俗謡からの脱化、俗語・方言何でもござれの傍若無人ぶりで、しばしば詩的燃焼の稀薄な凡作や、あくの強い体臭に悩まされながらも、夥しい作品の量と充実しきった作句力の前には、誰しも目を瞠らざるを得ない。(1)」のである。

『七番日記』の巻末に記された年次別の作句数（中村六左衛門利貞の集計）を見ると、次のとおりである。

文化七年　七五二句
文化　八年　四七二句
文化　九年　一〇八〇句
文化一〇年　一一七三句
文化一一年　九九八句
文化一二年　八四三句
文化一三年　八五四句
文化一四年　九七五句
文化一五年　九〇一句

ついでに、『八番日記』（重出四九句を含む）も見ておく。

文政二年　一〇二七句
文政三年　七八八句
文政四年　一三二〇句